

英語表現 I における即興で話す力の指導

—気付きを促す授業を通じて—

千葉県立〇〇〇〇高等学校 〇〇 〇〇 (英語)

1 研究の背景と目的

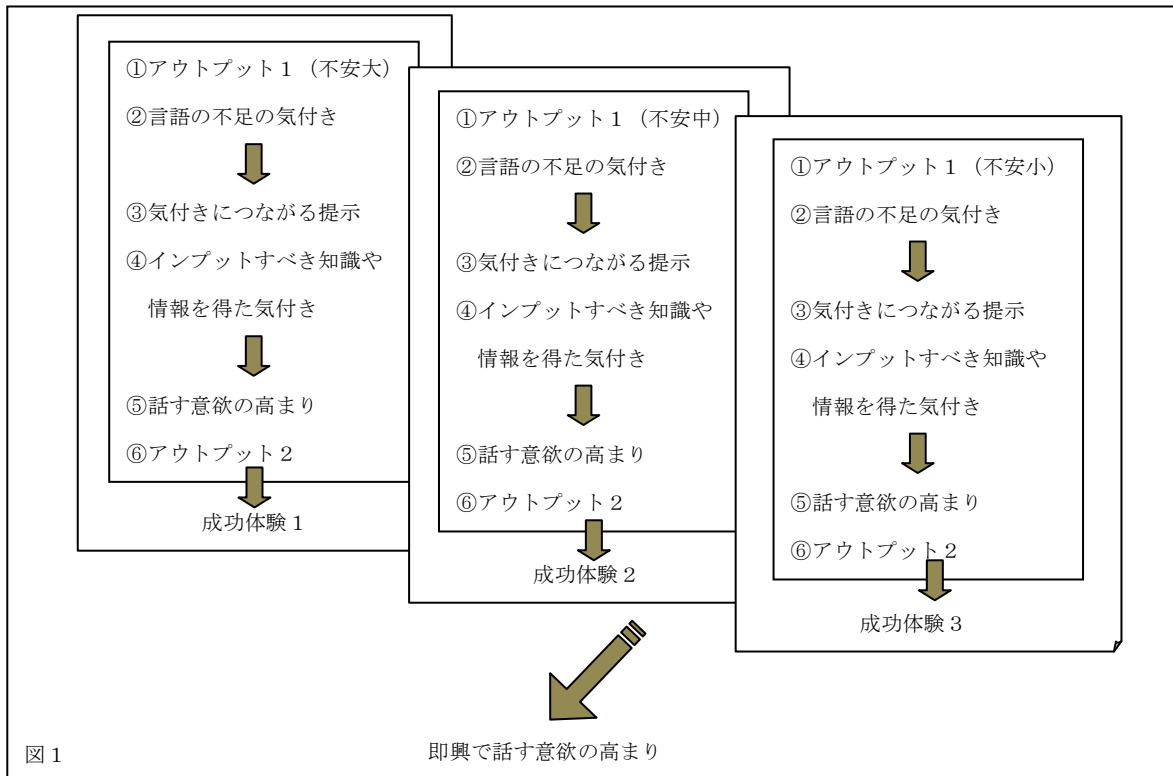
新学習指導要領では、4領域の言語活動を統合的に行うことを通して、生徒に英語の運用力をつけることが強調されている。また「英語表現 I」においては、与えられた話題について即興で話す力をつけることが求められている。つまり、事前に準備していない状態からでも、自分の知っている言葉を使って英語で自分の考えを伝えることができる力と言えらる。まさに、実際のコミュニケーションの場において対応できる力が求められているのであり、授業はコミュニケーション能力育成のためのトレーニングの場でなければならない。そこで、即興で話す力を伸ばすために授業の中ですべきトレーニングは何か、について研究することとした。

2 先行研究と研究仮説

即興で話す力をつけるためには、まず、即興という緊張を強いられる場面であっても英語で話してみようと思える気持ち、つまり意欲を育てる必要がある。本研究においては即興で話す力を高めるために、「インプット→アウトプット」の順番ではなく、「アウトプット→インプット」の順番でスピーキング活動を行うこととした。というのは、即興の場面で英語で話す力をつけるためには、インプットをしてからアウトプットをするトレーニングだけをしていては、実際に即興で英語でやり取りを行う場面になった時に、対応できる力は身につかないと考えたからである。つまり、そのための「意欲」を伸ばすことが最重要課題であると考えた。即興の場面で困らないようにストラテジーを活用して何とかその場を切りぬける力も重要であるが、本研究で言うところの即興で話す力とは、その前段階として即興の場面そのものに耐える力である。そしてその過程で起こる生徒の「気付き」が、話す意欲を高めることにつながると考えた。

横山(1999)は、「教育にとってアウトプットは重要な要素であると言えるし、少なくともアウトプットの機会が「認知比較」につながり、それによって新たなインプットの吸収が促進されるという点は確認されている」と指摘している。また、「現在のところ、アウトプットをめぐる研究から引き出すことのできる結論は、アウトプットを経て意識された中間言語の不足が、後のインプットの際にその不足を補うべく「気付き」を高め、不足したニーズに合致したインプットを摂取してインテイクに変える効果がある」としている。

「気付き」や「意欲」という生徒の内面で起こる事象を正確に測定することは不可能かもしれない。しかし、トレーニングを継続することにより、効果的なインプットを得たという「気付き」が、生徒の次なるアウトプットや即興でも話してみようという「意欲」へとつながり、即興で話す力を高めるのではないかと考えた。図1は「即興で話す意欲を高めるアウトプットのプロセス」をまとめたものを示しており、次に本研究の仮説を提示する。



仮説1 アウトプット1のあとで、生徒の気づきを促すインプットを行い、もう一度アウトプット（アウトプット2）をする、という一連のプロセスの中でアウトプットのトレーニングを積み重ねれば、即興で話す力が高まるだろう。

仮説2 話す内容をキーワードだけでバルーンに書きながらアウトプットをするトレーニングを積み重ねれば、即興で話す力が高まるだろう。

上記仮説を、インタビューテストと生徒アンケートを実施し検証する。

3 研究方法と内容

本研究を進めるにあたり、上記に示す「即興で話す意欲を高めるアウトプットのプロセス」に加え、以下の点に注意を払い授業を実施する。3.1,2 は主に生徒に安心感を与えるために、3.3,4,5 は主に生徒に気づきを促す上で重要なポイントである。

3.1 親和関係を構築すること

生徒は自分の考えを英語で表現することに対して不安感を抱いていることが多い。MacIntyre & Gardner(1991)は、「即興での自由なスピーチが最も落ち着きを失わせる」としている。そこで年度初めには、生徒と十分な親和関係を築くことから授業をスタートさせたい。「間違っても大丈夫」と生徒が思えるような環境作りをする必要がある。また、生徒をよくほめることも必要であろう。文法上の誤りや発音の不正確さを指摘することも避けたい。「どんなことを言いたいのかが伝わればOK」、「間違いを探したいのではなく、あなたがどんな意見をもっているのか知りたい」というメッセージを生徒に伝えることが大切である。

3.2 到達目標と評価方法の明確化

上記のMacIntyre & Gardner(1991)は「…不安を与えるような状況では、間違いを恐れ、「参

加]することより「沈黙」してしまう。教師や他の生徒は間違いを直そうとして話を聞いており、悪い評価を与えられると懸念している」としている。つまり、即興で話す力をつけるトレーニングを行うには、授業で行っていることが到達目標のどの位置にあたるのか、またどんな風に評価されるのかを明確にする必要があり、それによって生徒は安心して授業に取り組むことができると考えられる。そこで本研究においては、年度当初に到達目標や評価方法を生徒にわかりやすい言葉で表記したものを作成し、シラバスと同時に生徒に配付した。

3.3 瞬時に考えをまとめ上げるためのトレーニング

話す内容を整理するために、ブレインストーミングの時間を取ることは教室の場においては有効であろう。ペアやグループで自由に意見を出し合ったり意見を交換し、様々な考え方をすることで多角的な視点から物事を深く考える力が身につくからである。しかし、当然実際のコミュニケーションが起こる場においてはそのような時間はなく、実際には自分の考えを瞬時にまとめ上げなければならない。そこで、本研究においては、瞬時に考えをまとめ上げるためのトレーニングとして、バルーンの中にキーワードのみを書き、それをメモ代わりにアウトプットをするトレーニングを行う。中央のバルーンからいくつかのバルーンに枝分かれし、それぞれのバルーンがさらに階層状に展開していく様は、頭の中で起こっている論理の展開を視覚的にとらえることを可能にするのである。また、話す内容を一語一語書き出さなくとも、キーワードを手掛かりに自分の考えを英語で表現する力も身につくであろう。本研究においては、2種類のブレインストーミングのやり方を用い、1つを「flower」(図2)、もう1つを「tree」と呼ぶこととした。「flower」はクラス全体で考えを自由に出し合う際に用い、「tree」は「flower」のあとで、各自でブレインストーミングをし、話したり書いたりする順番でバルーンを階層状にまとめる際に用いる。このように、バルーン・チャートを用いた発表活動が続けることで、話す内容を一語一語文字に起さなくても、バルーンの中に書いたキーワードだけを手掛かりに自分の考えをまとめ、英語で伝えることができる感覚をつかませたいと考えた。

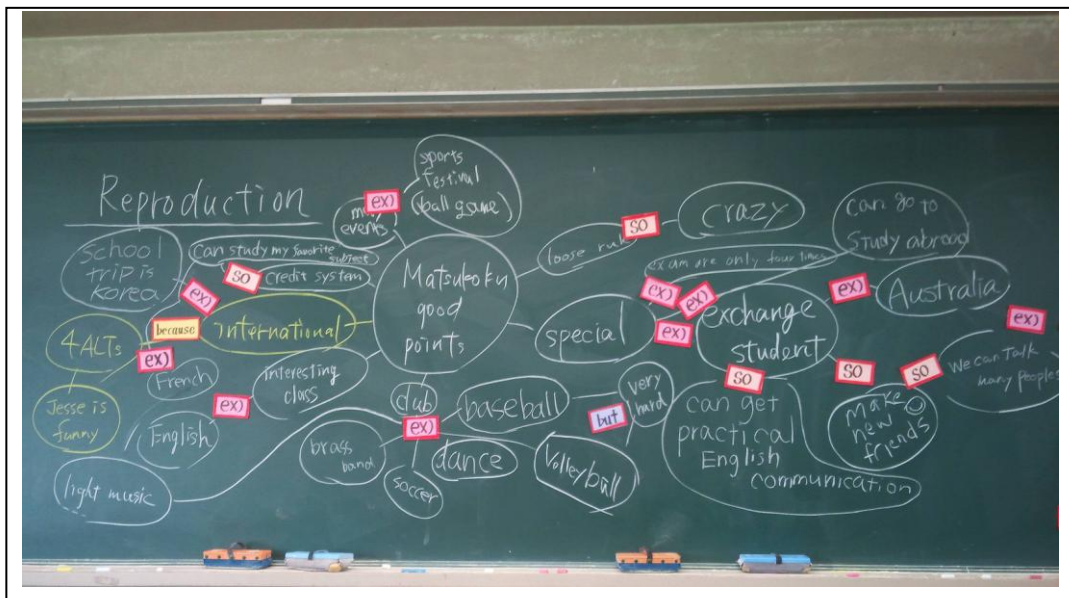


図2 flowerの例

3.4 気づきを促すインプット

不安感を抱えながらも不十分な英語でアウトプットをしたあとで、インプットを行う。イン

プットは、その表現があれば、よりの確に自分の考えを表明でき、かつ、他の場面においても応用が効きそうな表現に厳選し、2, 3種類提示する。ここでは、その中から必ず選ばなくてはいけないわけではなく、もしこの中の表現を使いたければ、使ってみてほしい、と生徒に伝える。これは、決定権は生徒にあるということ、また、正解は1つではなく、色々な表現方法があるということを理解してほしいためである。

3.5 会話を広げていくポイント「3A (スリー・エー)」

「3A (スリー・エー)」(「英語情報 2013 年6, 7月号」)とは、「Ask (尋ねる) Answer (答える) Add (追加する)」のことである。即興で1人で話し続けなければならない状況においては別であるが、相手がいて即興でやり取りを継続させる、という状況においては、自分の知っている言葉で相手に質問をしたり、その質問に自分も答えたり、それについてさらに情報を追加する、というサイクルに慣れ親しんでいることによって、やり取りをより継続させることができると考えられる。これを「気づきを促すインプット」の1つとして提示する。

4 研究計画

4.1 対象生徒・授業科目

平成 25 年度 1 年次生普通科 5 クラス (103 名)・英語表現 I

4.2 指導計画

平成 25 年 4 月～7 月

「即興で話す意欲を高めるアウトプットのプロセス」に従い、即興で話す意欲を高め、やり取りを継続させるトレーニングを以下の計画で行う。

	目標	主な学習活動
1	バルーンを使ったブレーストーミングに慣れる。	1. トピックについて、思いつく表現をクラス全員でバルーンに書き込んでいく (flower)。 2. トピックについて、各自で自分の考えを、話す順番でバルーンに書いていく (tree)。
2	教師の与える「気づきを促すインプット」を、関連するいくつかのトピックに応用させることができる。	例)「私の好きな～とその理由/私の嫌いな～とその理由」の表現を、トピックを変えて練習を積む。
3	バルーンに書かれたキーワードを見ながら、短いスピーチができる。	スピーチ原稿を用意せず、バルーンに書かれたキーワードだけを頼りに、短いスピーチをする。
4	「3A」を通して、やり取りを継続させる方法を学習する。	「3A」の使用法を理解し、トピックを変えて練習を積む。

平成 25 年 9 月, 10 月, 11 月

	目標	主な学習活動
1	バルーンを用いてブレーストーミングをする際に、論理展開を意識しながら、バルーンを階層状に書くことができる。	「flower」を行う際も「tree」を行う際も、バルーンと次のバルーンの間関係性を意識し、より詳しくより筋道立てて情報を書いていく練習を積む。
2	「3A」を効果的に使用し、やり取りを継続させることができる。	「3A」の使用法を理解し、トピックを変えて練習を積む。

5 研究実践

5.1 「即興で話す意欲を高めるアウトプットのプロセス」を用いた、即興で話す意欲を高め、やり取りを継続させるトレーニングの実践①（平成25年4月～7月）

1	<p>①「favorite food」というトピックで、どんな食べ物が好きか、なぜ好きかについて、flowerを行う。</p> <p>②同じトピックで、各自でtreeを行う。</p> <p>③ペアになり、お互いに質問し合う。→アウトプット1</p> <p>④「私の好きな～」という表現を3つ提示する。発音を確認した後で、どの表現が気に入ったか生徒に確認する。</p> <p>(A) It's _____ because.....</p> <p>(B) My favorite food is _____ because.....</p> <p>(C) _____ is my favorite because.....) →気付きを促すインプット</p> <p>⑤③をペアを変えて、数回行う。→アウトプット2</p> <p>⑥次にトピックを「favorite subject」に変え、どの科目が好きか、なぜ好きかについて、flowerを行う。</p> <p>⑦②③⑤のプロセスを行う。→アウトプット3</p> <p>【speech 活動】</p> <p>⑧スピーチのタイトルを提示する（ my favorite and least favorite ）。</p> <p>⑨スピーチの最初の言葉と終わりの言葉を、気付きを促すインプットとして提示する</p> <p>(A) I'm going to talk about..... (B) I would like to talk about</p> <p>(A) That's all. (B) Therefore, I like..... (C) In conclusion, I like.....)</p> <p>⑩目標・注意点等、評価のポイントを提示する。</p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th colspan="2">Speech 1 Title : my favorite and least favorite</th> <th>A</th> <th>B</th> <th>C</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td colspan="5">Criteria for the speech (スピーチの規準 for students)</td> </tr> <tr> <td style="width: 15%;">greeting</td> <td>最初に”Hello”, 最後に”Thank you for listening”を言っている。</td> <td style="text-align: center;">✓</td> <td style="text-align: center;">✓</td> <td></td> </tr> <tr> <td>introduction</td> <td>スピーチの最初に、何について話すかを言っている。</td> <td style="text-align: center;">✓</td> <td style="text-align: center;">✓</td> <td></td> </tr> <tr> <td rowspan="2">body</td> <td>好きなもの、嫌いなものについて、合わせて2つ以上言っている。</td> <td style="text-align: center;">✓</td> <td style="text-align: center;">✓</td> <td></td> </tr> <tr> <td>好きなもの、嫌いなものについて、その理由を言っている。</td> <td style="text-align: center;">✓</td> <td style="text-align: center;">✓</td> <td></td> </tr> <tr> <td></td> <td>好きなもの、嫌いなものについて、理由以外にも何か話している。</td> <td style="text-align: center;">✓</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>conclusion</td> <td>スピーチの終りに、まとめの言葉を言っている。</td> <td style="text-align: center;">✓</td> <td style="text-align: center;">✓</td> <td></td> </tr> <tr> <td rowspan="3">delivery</td> <td>【volume】 声量が十分である。</td> <td style="text-align: center;">✓</td> <td style="text-align: center;">✓</td> <td></td> </tr> <tr> <td>【eye contact】 聴衆をしっかりと見て話している。</td> <td style="text-align: center;">✓</td> <td style="text-align: center;">✓</td> <td></td> </tr> <tr> <td>【gesture】 手の動きや、顔の表情 (smile) などを使っている。</td> <td style="text-align: center;">✓</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>bonus</td> <td>暗記をしている (メモに頼らずにスピーチしている)。</td> <td style="text-align: center;">✓</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td></td> <td>評価</td> <td style="text-align: center;">A</td> <td style="text-align: center;">B</td> <td style="text-align: center;">C</td> </tr> </tbody> </table>	Speech 1 Title : my favorite and least favorite		A	B	C	Criteria for the speech (スピーチの規準 for students)					greeting	最初に”Hello”, 最後に”Thank you for listening”を言っている。	✓	✓		introduction	スピーチの最初に、何について話すかを言っている。	✓	✓		body	好きなもの、嫌いなものについて、合わせて2つ以上言っている。	✓	✓		好きなもの、嫌いなものについて、その理由を言っている。	✓	✓			好きなもの、嫌いなものについて、理由以外にも何か話している。	✓			conclusion	スピーチの終りに、まとめの言葉を言っている。	✓	✓		delivery	【volume】 声量が十分である。	✓	✓		【eye contact】 聴衆をしっかりと見て話している。	✓	✓		【gesture】 手の動きや、顔の表情 (smile) などを使っている。	✓			bonus	暗記をしている (メモに頼らずにスピーチしている)。	✓				評価	A	B	C
Speech 1 Title : my favorite and least favorite		A	B	C																																																											
Criteria for the speech (スピーチの規準 for students)																																																															
greeting	最初に”Hello”, 最後に”Thank you for listening”を言っている。	✓	✓																																																												
introduction	スピーチの最初に、何について話すかを言っている。	✓	✓																																																												
body	好きなもの、嫌いなものについて、合わせて2つ以上言っている。	✓	✓																																																												
	好きなもの、嫌いなものについて、その理由を言っている。	✓	✓																																																												
	好きなもの、嫌いなものについて、理由以外にも何か話している。	✓																																																													
conclusion	スピーチの終りに、まとめの言葉を言っている。	✓	✓																																																												
delivery	【volume】 声量が十分である。	✓	✓																																																												
	【eye contact】 聴衆をしっかりと見て話している。	✓	✓																																																												
	【gesture】 手の動きや、顔の表情 (smile) などを使っている。	✓																																																													
bonus	暗記をしている (メモに頼らずにスピーチしている)。	✓																																																													
	評価	A	B	C																																																											
2	「my treasure」というトピックで1と同様の活動を行う。																																																														
3	<p>①「Summer is better than winter.」というトピックでflowerを行う。夏の良いところは白いチョークで、夏の嫌なところは黄色いチョークで書くように指示する。</p> <p>②同じトピックで、各自でtreeを行う。</p>																																																														

	<p>③ペアになり、お互いに意見交換をする。→アウトプット1</p> <p>④相手と意見が同じだった場合と、意見が違った場合の表現を提示する。発音を確認した後で、どの表現が気に入ったか生徒に確認する。((A) I think so, too. Also..... (B) You took the words right out of my mouth! Also.... (C) You read my mind! Also... / (A) You are not wrong, but..... (B) You might be right, however.... (C) Maybe, but) → 気付きを促すインプット</p> <p>⑤③をペアを変えて、数回行う。→アウトプット2</p> <p>⑥次にトピックを「Outdoors vs. indoors」に変え、①と同様の flower を行う。</p> <p>⑦②③⑤のプロセスを行う。→アウトプット3</p> <p>【group-speech 活動】</p> <p>⑧グループスピーチのタイトルを提示する (Outdoors vs. indoors)。</p> <p>⑨グループスピーチのルールを説明する (4～5名のグループになり、スピーチの順番を確認する。Speaker 1 は I think で始め、自分の意見を述べる。Speaker 2 は Speaker 1 の意見に対して、同意見かそうでないかを述べた後で、自分の意見を述べる。以下、同じ流れで行う。Speaker 以外の方は、Speaker の意見を tree でメモを取りながら聞く。)</p> <p>⑩相手と意見が同じだった場合と、意見が違った場合の表現を確認する。</p>
4	<p>【3Aを用いた活動】</p> <p>①日本に来たばかりの留学生に日本の「あるもの」について説明するという状況を設定する。</p> <p>② ‘Sushi’をトピックにし、ペアの片方が外国人役になり、質問し、もう一方が英語で説明をする。→アウトプット1</p> <p>③ものを説明する際に役に立ちそうな表現を3つ提示する。((A) It's a sport/ food/ city. (B) We need _____ . (C) It is famous in/for _____ .) →気付きを促すインプット</p> <p>④②をトピックを変えて、ペアの役割も変えながら数回行う。→アウトプット2</p> <p>⑤①の状況に、次の条件を加える。「あるもの」についての説明が終わっても、留学生との会話を1分間続ける。」</p> <p>⑥ペアになり、新たなトピックで1分間やり取りを行う。→アウトプット1</p> <p>⑦話を広げたり、やり取りを継続させる時のポイントを3つ紹介する。((A) Ask (B) Answer (C) Add) →気付きを促すインプット</p> <p>⑧⑥をトピックを変えて、ペアの役割も変えながら数回行う。→アウトプット2</p>

5.2 「即興で話す意欲を高めるアウトプットのプロセス」を用いた、即興で話す意欲を高め、やり取りを継続させるトレーニングの実践② (平成25年9月, 10月, 11月)

1	<p>①「Matsukoku's good points」というトピックで、松戸国際高校のいいところは何か、どんなところが好きか、なぜ好きかについて、flower を行う。 because so for example and butと書かれたマグネットを用意する。生徒は前のワードの次に、選んだマグネットを置き、つながりを考えながらバルーンの中にワードを記入していく。</p> <p>②同じトピックで、各自で tree を行う。</p> <p>③ペアになり、お互いに質問し合う。→アウトプット1</p> <p>④「～がある」という表現を3つ提示する。発音を確認した後で、どの表現が気に入ったか生徒に確認する。 (A) We have _____ at/in..... (B) There are _____ at/in..... (C)has _____) →気付きを促すインプット</p> <p>⑤③をペアを変えて、数回行う。→アウトプット2</p> <p>【group-speech 活動】</p> <p>※「即興で話す意欲を高めるアウトプットのプロセス」の実践①と同じ</p>
---	--

2	<p>①「My favorite teacher」というトピックで tree を行う。その先生が誰で、なぜ好きなのかを具体的に書くよう指示する。また、「because」「for example」「but」「so」を紹介し、バルーン同士をつなぐ際に使用するよう指示する。</p> <p>②ペアになり、お互いに発表し合う。→アウトプット1</p> <p>③以前（「my favorite」の時に）紹介した表現を、再度紹介する。→気付きを促すインプット</p> <p>④②をペアを変えて、数回行う。→アウトプット2</p> <p>【group-speech 活動】</p> <p>※「即興で話す意欲を高めるアウトプットのプロセス」の実践①と同じ</p>
3	<p>①「My “Thanks to” story」と題して、“My favorite teacher”の tree を発展させた活動を行う。ここでは、その先生に出会って自分がどう変わったのか、変わる前と変わった後について tree を使って内容を深めさせる。また、「because」「for example」「but」「so」を紹介し、バルーン同士をつなぐ際に使用するよう指示する。</p> <p>②ペアになり、お互いに発表し合う。→アウトプット1</p> <p>③気付きを促すインプット（「My favorite teacher」と同様）</p> <p>④②をペアを変えて、数回行う。→アウトプット2</p> <p>【group-speech 活動】</p> <p>※「即興で話す意欲を高めるアウトプットのプロセス」の実践①と同じ</p>
4	<p>【3Aを用いた活動】</p> <p>※「即興で話す意欲を高めるアウトプットのプロセス」の実践①の内容に以下の点を加えた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本語を使わないようにするためのポイントを3つ紹介する。（(A) ...and other things (B) It's like... (C) It's a special... for...）→気付きを促すインプット

6 研究評価

6.1 インタビューテスト

6.1.1 インタビューテスト内容

平成25年7月と11月に、研究対象5クラスのうち1クラス21名に対して、インタビューテストを実施した。「日本に来たばかりの交換留学生」と話をするという設定で、面接官ふんずる交換留学生が「日本のあるもの」について即興の質問をする。受検生徒はそれに答えながら、1分以上会話を継続させるという内容である。やり取りの中で面接官は最低限の応答のみをし、出だしの即興の質問以降、極力発問はしない。以下、出題した「日本のもの」と、独自の評価規準である。評価基準の(1)(2)に関しては、即興でのやり取りを継続させる意欲を測るための項目であり、(3)(4)(5)に関しては、即興でのやり取りを継続させようとする過程で陥りやすい点として掲げた項目である。

	7月	11月
foods	sukiyaki	okonomiyaki
sports	Kendo / Judo	sumo
places	Sky Tree	Kyoto
(1)	うまく言えない部分があっても、単語レベルで反応したり、自分の知っている言葉などを使って、不十分な英語であっても、1分やり取りを続けようとしている。	

(2)	(1)「日本のもの」の説明のあとで、3Aを活用するなど、やり取りを継続できる。 (2)「日本のもの」の説明だけでやり取りを継続できる。 (3)「日本のもの」の説明だけで1分程度やり取りを継続でき、その後も3Aを活用するなど、さらにやり取りを継続できる。
(3)	ただの情報の羅列に終わらず、話の流れがあり、一貫性がある。
(4)	不自然な間がない。(5秒程度の間があいた場合を、不自然な間とする。)
(5)	(1)「何て言うんだっけなあ」「えーどうしよう、わからない」など、トピックと関係ないことを日本語で言う。 (2)英語での表現方法が分からない時に、日本語を使い、英語で言い換えない。 (3)日本語を使用していない。または、日本語を使う時には、英語で言い換えている。

6.1.2 インタビューテスト結果

1分やり取りを継続できた生徒を「グループA」、できなかった生徒を「グループB」とし、グループAの中で、上記の観点を満たしている生徒が何名いるか調査した。また、右4列は6.2で紹介する当該生徒のアンケートの結果である。

生徒	7月実施インタビューテスト							11月実施インタビューテスト							アンケート				
	グループ	観点 (1)	観点 (2)	観点 (3)	観点 (4)	観点 (5)	継続時間	グループ	観点 (1)	観点 (2)	観点 (3)	観点 (4)	観点 (5)	継続時間	1	2	3	4	
1	A	○	1	○	(5)	3	95	A	○	3	○	○	3	67	A	C	A	C	
2	B	継続時間35秒(不自然な間7秒)							A	○	3	○	○	3	80	A	A	A	A
3	A	○	1	○	(16)	3	95	A	○	1	○	○	3	74	A	A	A	A	
4	A	○	2	×	○	2	70	A	○	1	○	○	3	65	A	A	A	A	
5	A	○	1	○	(20)	2	80	A	○	3	○	○	3	66	A	A	A	A	
6	A	○	1	○	○	2	72	A	○	3	○	○	3	80	A	A	A	A	
7	A	○	2	×	(10)	3	61	A	○	1	○	(7)	2	63	A	A	A	C	
8	A	○	2	×	○	1	61	A	○	1	○	(5)	1	80	A	A	A	C	
9	A	○	1	○	○	3	80	A	○	1	○	○	3	60	A	C	A	A	
10	A	○	1	○	(23)	3	75	A	○	3	○	(10)	3	78	A	C	A	A	
11	A	○	2	○	(7)	3	72	A	○	3	○	(12)	3	87	A	A	A	A	
12	A	○	1	○	○	3	62	A	○	1	○	○	3	70	A	A	A	A	
13	A	○	1	○	○	2	75	A	○	3	○	○	3	123	A	A	A	A	
14	A	○	1	○	○	3	65	A	○	3	○	○	3	70	A	A	A	A	
15	A	○	1	○	○	3	90	A	○	2	○	○	3	74	A	A	A	B	
16	B	継続時間30秒(不自然な間6秒)							A	○	3	○	(7)	3	90	A	A	A	A
17	A	○	1	○	(10)	3	60	A	○	1	○	○	3	85	A	A	A	A	
18	B	継続時間50秒(不自然な間13秒)							A	○	1	○	○	1	70	A	A	A	C
19	A	○	1	○	○	3	65	A	○	1	○	○	3	73	A	A	A	A	
20	A	○	1	○	(10)	2	60	A	○	1	○	○	2	62	A	A	A	A	
21	B	継続時間45秒(不自然な間8秒)							A	○	1	○	(20)	3	80	A	C	A	A

※観点(4)の()内の数字は、不自然な沈黙の合計時間(秒)である。

7月実施インタビューテスト			11月実施インタビューテスト		
グループAの生徒	17名		グループAの生徒	21名	
観点(1)を満たしている生徒	17名		観点(1)を満たしている生徒	21名	
観点(2)を満たしている生徒	(1)	13名	観点(2)を満たしている生徒	(1)	11名
	(2)	4名		(2)	1名
	(3)	0名		(3)	9名
観点(3)を満たしている生徒	14名		観点(3)を満たしている生徒	21名	
観点(4)を満たしている生徒	9名		観点(4)を満たしている生徒	15名	
観点(5)を満たしている生徒	(1)	1名	観点(5)を満たしている生徒	(1)	2名
	(2)	5名		(2)	2名
	(3)	11名		(3)	17名
グループBの生徒	4名		グループBの生徒	0名	

6.2 アンケート

本研究における授業内の活動が即興で話す力を高める上でどのように影響したかについて、研究対象5クラス103名に対して意識調査を行った。以下アンケートの集計結果である。

1	<p>バルーンによるメモをもとに話すトレーニングを続けることは、即興で話す力をつけるのに役立つ。</p> <p>【 A. はい(98名) B. わからない(3名) C. いいえ(2名) 】</p>
理由	<p>A. 考えをまとめる力がつく(33名) / バルーンを使うと、自分の考えを展開させやすい(12名) / 考えを英語に訳して書くのは難しいが、バルーンだと簡単に話せる(9名) / やらされてるのではなく、自分でやっている感じがするので、記憶に残る(6名) / その他 B. 考えをまとめる力はあるが、すべて書きだしても考える力がつくと思うので、どちらでもいい / その他 C. バルーンにメモだけ書くようにと言われても、私は文を書いてしまう / 自分で考えなければいけないのが大変だ</p>
2	<p>英文を全部書き出したり、先生に正しい英語に直してもらったりせずに、バルーンによるメモをもとに話すトレーニングを積んだ方が、即興で話す力をつけるのに役立つ。</p> <p>【 A. はい(81名) B. わからない(0名) C. いいえ(22名) 】</p>
理由	<p>A. 毎回やっていて慣れたら、メモだけで言葉が出てくるようになった(26名) / 間違っているけど、自分が話したいことが伝わるようになった(10名) / 自由に考えながら話せるから楽しい・簡単だ(9名) / 自分の知っている英語の中で、できるだけ説明しようとする力がついた(7名) / 毎回その場でメモを見て、頭を使って話す練習をしているから(7名) / 自分で間違いに気付いて、正しい言い方を理解することができていっていると思う(5名) / 文法とか細かいことを難しく考えないで、自分の考えを伝えられるようになった(5名) / 時間が短縮できて、授業がはかどる / 答え方は教わってるから、自分の考えを当てはめればいだけ / バルーンだといろいろ足すことができる / わからない単語は聞けば先生が教えてくれるから C. 英語があっているか不安になる(15名) / メモだけで頭の中で文を構成するのが、まだ難しい(5名) / 適切な接続詞がわからない</p>
3	<p>「*Today's three options」は、1つだけではなく、いくつかの選択肢の中から選ぶ形式である方が、英語で話す力をつけるのに役立つ。【 A. はい(101名) B. わからない(0名) C. いいえ(2名) 】</p>
理由	<p>A. 自分が気に入った表現を選んだ方が、覚えると思う(61名) / 「これを覚えなさい」と1つ出されるよりも、気が楽で覚えやすい(8名) / シチュエーション毎にどんな受け答えをすればいいのかわかるから、役に立つと思う / その他 C. 全部あいまいになってしまう / 3つを意識し過ぎてしまう</p>

4	<p>「英語表現 I」の授業を受けてみて、即興で英語で話すことに対して抵抗がなくなったと思う。</p> <p>【 A. 以前より抵抗がなくなった（62名） B. 以前と変わらず抵抗がある（20名） C. 前から抵抗がなかった（21名） 】</p>
理由	<p>A. 授業中に英語で話す時間がたくさんあり、慣れたから（22名）／先生も生徒もみんな英語で話しているから、間違えても目立たないから・間違えても気にしなくなった（11名）／その時必要な表現を簡単な文でその場で教わるから（8名）／間違えても言いたいことが相手に伝わることがわかったから（6名）／先生が間違ってもいいと言ってくれるから（5名）／英語で話すことが楽しくなった・緊張しなくなった（4名）／間違えてもいいから発表することが大事だと気付いた（2名）／同じような表現を何度も使ったりして、話し方がわかってきた（2名）</p>

*Today's three options とは、気付きを促すインプットのことである。

6.3 考察

6.3.1 7月実施インタビューテスト考察

7月実施のインタビューテストでは、グループAの生徒が17名、グループBの生徒が4名であった。本研究においては、即興で話す力を測定するために、1分という制限時間を設けた。そのため、制限時間を満たせなかった4名はグループBとなった訳であるが、仮にこの4名が一貫性のあるやり取りを追求する中で、言葉に詰まってしまったのだとすると、どうであろうか。ここで、グループAの観点（2）②の生徒4名について考えたい。彼らは1分以上話し続けたが、内容に一貫性がなく、さらにそのうち3名は観点（4）の条件を満たしていない。しかし、話に一貫性がなくとも、何とか言葉をひねり出そうとした点を考慮に入れ、即興で話す力が付き始めていると判断した。つまり、即興の質問に対して説明だけで一分以上一貫性のある話をし続けることは7月時点ではかなり難しいことであり、反対に3A等を活用しながらやり取りを継続させるトレーニングをもっと積めば、グループAに入る生徒はより増えると考えた。また、観点（2）で「3A」を活用した生徒14名のうち11名が観点（3）の条件を満たしていることから考えても、「3A」をうまく取り入れながらやり取りを継続させるトレーニングを続けることは、効果があると判断した。さらに、バルーンを用いたスピーキングトレーニングのスタイルに、接続詞等を効果的に使用できるような活動を取り入れ、話の流れをより意識させるようなトレーニングを行うことも有効であると考えた。また、観点（5）に関しては、日本語を使わずにやり取りを継続させる方法を効果的なインプットとして紹介することで、回避できると考えた。以上のことから、上記の活動を実践②で取り入れることとした。

6.3.2 11月実施インタビューテスト考察

11月に実施したインタビューテストは、様々な点において7月のインタビューテストの結果を上回り、本研究の有効性を裏付けてくれたと考える。まず21名の生徒全員がグループAとなり、さらに一貫性のあるやり取りができるようになった。また、観点（3）（4）（5）すべてを満たしている生徒は7月の5名から13名に増加した。以下は観点（3）が×から○に変わった「生徒4」のインタビューテストの発話の記録である（〔 〕内は面接官の発話である）。

「7月インタビューテスト」

〔What is Sukiyaki?〕 Sukiyaki is Japanese food. Sukiyaki is good food. Tofu and konnyaku and meat. Egg. Sukiyaki is special food. My home happy event eat. I like it because I like meat.

「11月インタビューテスト」

[*What is Okonomiyaki?*] Okonomiyaki is Japanese food. It is delicious. Okonomiyaki needs vegetables, flour, and so on. I like Okonomiyaki because it has sauce and mayonnaise, mix them. Do you know Okonomiyaki? [*I don't know, but it sounds delicious. I want to eat.*] I think Dotonbori is nice store. Cheap. Yabashira has store.

また、日本語を使用せずにやり取りを継続できた生徒の人数は11名から17名に増加し、そのうち授業内に「効果的なインプット」として紹介した表現を使用した生徒は12名であった。

6.3.3 アンケート考察

4つの質問項目のうち、質問4についてここで取り上げたい。この質問は、即興で話す意欲を高めるトレーニングを受けたことにより、「以前よりも抵抗が減った」と答える生徒が多く出ることを期待して設定した質問である。結果は、B「以前と変わらず抵抗がある」と答えた生徒は103名中20名であった。決して少ないとは言えない人数である。ここで、インタビューテストを実施した1クラス21名中、質問4にBと答えた生徒1名と、C（「前から抵抗がない」）と答えた4名のインタビューテストの結果を見比べたい。抵抗感の有無が即興で話す力にどれ程影響を与えているだろうか。

生徒	7月実施インタビューテスト							11月実施インタビューテスト							アンケート			
	グループ	観点 (1)	観点 (2)	観点 (3)	観点 (4)	観点 (5)	継続時間	グループ	観点 (1)	観点 (2)	観点 (3)	観点 (4)	観点 (5)	継続時間	1	2	3	4
1	A	○	1	○	(5)	3	95	A	○	3	○	○	3	67	A	C	A	C
7	A	○	2	×	(10)	3	61	A	○	1	○	(7)	2	63	A	A	A	C
8	A	○	2	×	○	1	61	A	○	1	○	(5)	1	80	A	A	A	C
18	B	継続時間50秒（不自然な間13秒）						A	○	1	○	○	1	70	A	A	A	C
15	A	○	1	○	○	3	90	A	○	2	○	○	3	74	A	A	A	B

「生徒15」はBと答えた唯一の生徒であると同時に、11月のインタビューテストで、質問に対する説明だけで、筋道立てて1分以上やり取りを継続することができた。以下は「生徒15」のインタビューテストの発話の記録である。

「7月インタビューテスト」

[*What is Judo?*] Judo is a Japanese traditional sports. We have strong body. Two human ...play. Do you like sports? [*Yes, I like baseball.*] Baseball! I like badminton. [*I see.*] I was a member of badminton club junior high school students. Do you like badminton? [*Yes, but its very difficult for me.*] Do you like watching badminton? [*Yes, its exciting.*] I watched Olympic game. [*On TV?*] Yes. Shiota player was good.

「11月インタビューテスト」

Kyoto is prefecture. There is in Japan. Kyoto..Yatsunashi is famous in Kyoto. Yatsunashi is like a cake. It is sweat. Yatsunashi is many kind. It is very delicious. And Kyoto has many temple and shrine. When I was third Junior high school student, I went Kyoto and Nara as school trip. It was very fun.

「生徒15」は、アンケートにおいて「以前と変わらず抵抗を感じる」と答えているが、両インタビューテストにおいて、グループAに属し、日本語を使わずに一貫性のあるやり取りを継続させることに成功している。一方、C（「前から抵抗がない」）と答えた生徒4名のインタビューテストの結果を見ると、全員に共通の点は見当たらないが、生徒7・生徒8・生徒18の7月のインタビューテストの結果と、生徒8と生徒18の11月のインタビューテストの観点（5）の結果を見ると、Bと答えた生徒15程は良い結果を残していないと言える。つまり、抵抗感の有無とインタビューテストにおける即興で話す力との間に関連性を見つけることはできなかった。研究開始当初、筆者は「抵抗感の減少」＝「意欲の増加」であると考えていた。しかし本研究を通して気付いたことは、抵抗感が減ることと意欲が増加することはイコールではなく、それらの感情は共起し、抵抗を感じている生徒から抵抗感をなくすことは厳しいかもしれないが、抵抗を抱きながらも、がんばろうとする生徒を育てることはできるのではないかということである。ここで、A（「以前より抵抗がなくなった」）と答えた生徒の理由を見ていきたい。ここに書かれた理由のほとんどが「3 研究方法と内容」で示した「親和関係を築くことの大切さ」や、「効果的なインプット」に関係している。即興で話す力をつけるためのトレーニングを受けたことにより抵抗感が以前よりもやわらいだと言えるだろう。ただし、Aと答えた生徒も、抵抗感を完全に払拭できた訳ではない。つまり、即興で英語で話すことに対する抵抗感を拭き去ることは難しいことであるが、抵抗感があつたとしても、親和関係を築きながら少しずつ抵抗を減らすことにつながる配慮を教員が続けることにより、抵抗があつたとしても、即興で話す力をつけることは可能であると思われる。

7 結論

以上の研究により、以下のように結論づける。

結論1 アウトプット1のあとで、生徒の気付きを促すインプットを行い、もう一度アウトプット（アウトプット2）をする、という一連のプロセスの中でアウトプットのトレーニングを積み、即興で話す力が高まる。

結論2 話す内容をキーワードだけでバルーンに書きながらアウトプットをするトレーニングを積み、即興で話す力が高まる。

8 引用文献等

横山紀子（1999年3月）「インプットの効果を高める教室活動：日本語教育における実践」
日本語国際センター紀要第9号

MacIntyre, Peter D., Gardner, Robert C. (1991) *Methods and Results in the Study of Anxiety and Language Learning: A Review of the Literature*, *Language Learning* 41:1, March 1991, pp. 85-117

茨城県坂東市立岩井中学校（2013年）「英語情報2013年6，7月号」

文部科学省（2009年3月）高等学校学習指導要領